

「土佐紙業の恩人」没後100年 村上 弥生

高知から四日ばかりで鳥取へ到着した吉井源太は、翌日到着届を出しに県庁へ行った。会計課員に提出し、農商課の係員二人と色々話をしたと日記に書かれている。

このような巡回指導は、双方の県庁を通じて決定され、教師を委託されることになる。この時源太は、体調不良のため鳥取への出発を少し延期していた。出発延期の願いなども高知県庁あてに出さなければならなかった。鳥取県庁への到着届を出す必要もあったのだ。

源太は、係員から鳥取における状況を少し聞き、ここでは人々が静かでおとなしく、のんきであり勉強をしていないようだ、という感想を書いている。休み

なく働いていた源太にとって、活気のあった高知での様子から比べると物足りぬ感じを受けたのだろうか。

次の日には鳥取巡回で指導する項目を書き出し、巡回先で話す講演内容を考えるなどして準備を整えた。翌三月八日、いよいよ出発。それから連日、ほとんど一日ないし二日の滞在と移動を繰り返して指導することになる。まずは県西部の主要なところを十五日間ほどかけて指導に回った。このあと県東部を回る。

鳥取市から西へ二十キロほどのところ、県東部にある山根は、現在も因州和紙産地として有名なところ。三月二十三日にはここで、六十人あまりの人を前に、製紙に関するさまざまな技法

について話した。夜は戸長と学校の先生と三人で酒を飲んだとある。翌日は三椏の煮熱につい

ての見本を見せたりして、三時に鹿野へ向けて立った。秀吉の時代に戦国大名の亀井茲矩が治めた鹿野城



現在も作られている「因州筆切れず半紙」。三椏が入って滑らかで、筆が切れないのが名前の由来

があったところだ。源太はその城跡へ行き、石垣が残って、堀の跡は当時のままであることなどを見、勇士の功労を眼前に見るようだという感想を書きとめている。源太は、訪れた各地で古い史跡などを見て、当時をしのぶこともよくあった。

午後一時に鳥取の宿泊先に戻る。町の医師二人に来てもらい、薬を処方してもらった。この夜は横になって寝ることができなかった。書かれている。

ここから山間部を南へ進み、各所でさまざまな土地の様子を見ながら指導をした。三月二十八日、鳥取市の南西約十三キロのところにある上砂見村というところへ着いた時に、持病である喘息の発作を起こしてしまった。土地の医師を呼んで薬をもらうが治らない。係員が相談をして、もう少し大きい村からも医師を呼んだ。その医師は翌朝四時に到着していろいろな薬を

処方するが、良くならない。協議の結果、ひとまず鳥取へ引き上げることにした。

手当ての甲斐あって、翌朝からは少し快方に向かう。少し寝ることもできた。と、よろこんでいる。この中、鳥取県の委員からの見舞いを受け、高知県庁からは万国博覧会への出品の問い合わせがある。さらに、数日前に指導した山根からは、試験漉きの紙が送られてきて、評価を求められたりするのだった。

(京大大学院研修員、京都府在住)